

タイの米産地における粳の流通過程と商業資本

矢野 泉・三國 英実

広島大学生物生産学部, 東広島市 739

1995年11月6日 受付

要 旨 商業資本の機能は、基本的機能と副次的機能に大別できる。基本的機能は、需給の整合と売買の接合という流通過程に与えられた社会的役割を果たすためのものであり、副次的機能はそれを補う機能である。農産物取扱商業資本の場合、農産物の商品としての独自性から、この2つの機能が独立して行われることは少なく、特に発展途上地域においてはその分離が困難となる。また発展途上地域の社会環境では、機能は本来の役割とともに「前期的」性格をもちやすい。タイでは社会環境の整備が進み、粳市場における商業資本の機能から「前期的」性格が払拭されつつあり、商業資本は機能本来の役割の遂行に存立基盤を移している。この変化は産地集荷市場の形成によって体现されているといえよう。

キーワード：流通過程、農産物取扱商業資本、タイ、粳市場、産地集荷市場

緒 言

これまで東南アジアの発展途上地域における農業開発の焦点は、主に生産力の向上に向けられてきた。しかし近年の国内経済の規制緩和や民営化といった構造調整政策の下で、各国における「市場」への関心が高まり、農業部門においても、政策の焦点は生産過程から流通過程へと移行している。ところが、既存の発展途上地域における市場、とくに農産物市場についての研究の多くは、国内外における農産物の需給関係についての数量的な分析などが多く、とくに現実の市場関係のもとで個別具体的に遂行される商人の機能や存在形態については、示唆的ではあるが断片的な叙述にとどまっており、体系的な研究は未だ遅れた状態にある。発展途上地域における資本主義の展開過程において、その主要な商品である農産物の流通を担っているのは商人、すなわち人格化された商業資本であり、農産物市場・流通構造や問題点をその具体性において把握しようとするならば、農産物取扱商業資本の機能についての分析を欠かすことはできない。

以上を問題背景とした本論文の課題は、タイの米市場を事例に、米流通過程の収集段階である産地における粳の流通過程の特徴を、商業資本の性格から明らかにすることである。商業資本の性格を考察するためには、その自立化、分化や排除、機能変化と多様なアプローチが可能であり、本来それら全てを考察する必要があるが、本論文ではとくに機能面に焦点をあてる。

I 発展途上地域における農産物取扱商業資本

1. 流通過程と商業資本

生産物が商品となるには、まずそれが販売されなければならない。商品の価値実現過程としてのこの流通過程は、商品の「命懸けの飛躍」と表現されるように、どれだけ生産技術が向上し生産が増大したとしても、それが商品として販売されない限り単なる生産物であり、生産者にとっても生産物の価値が実現されなければ自らの生産の継続が困難になるという点で、資本にとってもっとも困難かつ重要な過程である。また、商品の使用価値は、商品がそれを有用とする消費者の手に渡ってこそ意味あるものとなる。商品の流通過程とは、生産と消費を結ぶ過程であり、商品形態から貨幣形態への変換である $W-G$ (あるいは $W'-G'$) として表される。商業資本はその運動 $G-W-G'$ をもってこれを代位する。それによって、生産者の個別的な販売の偶然性が除去され、流通時間の短縮や流通費用の節約といった流通過程の効率化が可能となるのである。

商業資本の機能、あるいは商業の機能¹⁾に関する議論は様々であるが、上述のように流通過程の基本的な役割は生産と消費の結合である。したがって商業資本の最も重要な機能も、これまでの研究者が共通して指

摘するように、これに関わる需給の整合であり、これは実際商業資本の購買(集荷)と再販売(出荷)によって遂行される。また需給調整のために売買を接合し、商業資本の手に集中することによって価格形成が流通過程において行われることとなる。このとき、購買は販売を目的とした購買であり、販売は生産したものではなく購買したものの販売であることから、この2つは表裏一体の、どちらかを欠くということはありません。機能である。こうした商業資本の購買・再販売によって果たされる需給の整合は、生産と消費の使用価値的側面の結合であり、売買接合とそれによる価格形成は価値的側面の結合である。したがって、商業資本の基本的機能は商的流通機能としての再販売購入機能と、物的流通機能としての集出荷機能の2つに整理することができよう。これらの機能は商業資本の本質に関わる機能であり、商業資本が自立した資本として存在する限り不変の機能である。

一方、上記の機能の遂行を助ける副次的な機能も、流通過程における商業資本によって果たされることが多い。そうした機能としてはまず、信用販売などによる金融機能と、危険負担機能があげられる。危険負担には、商品の滅失や陳腐化に対する物理的危険と、価格下落や売れ残りなどの経済的危険、販売の偶然性に対する市場危険に対する負担が含まれている。危険負担機能も、商業資本の存立条件である販売の困難性と深く結びついた重要な機能であるといえる。これと並んで、市場情報の収集、提供などの情報機能もあげられる。その他に、輸送機能、保管機能がある。これらは、商業の機能としては実際の売買から切り離しては考えにくい重要視されている。しかし、保管や輸送過程をいわゆる「流通過程に延長された生産過程」として考える限りにおいては、純粋な商業資本の機能としてではなく、あくまで付随的な機能とされているのが一般的である。規格・選別機能や包装機能、加工機能も同様にとらえることができる。

2. 農産物取扱商業資本の機能

農産物取扱商業資本の機能も、基本的には商業資本の機能と大きくは異ならず、以下のように整理できるであろう。

I. 基本的機能(需給整合, 売買接合, 価格形成のために不可欠な機能)¹

- ①再販売購入機能 ②集出荷機能

II. 副次的機能(基本的機能の遂行のための補助的機能)

a) 物的機能

- ①保管機能 ②輸送機能 ③規格・選別機能
④包装機能 ⑤付随的加工機能

b) 非物的機能

- ①危険負担機能 ②金融機能 ③情報機能

ここで我々にとって重要な点は、これらが農産物取扱商業資本にとってどのように重要な機能であるかということである。換言すれば、商業資本の本質ともいえる基本的機能の遂行に、副次的機能がどのように関わっているのかを明らかにすることである。流通過程にだけ存在する商業資本の性格は、生産や消費の性格に強く規制される。また、その運動 $G-W-G'$ はあくまで商品を媒介として行われるので、商品の性格にも制約を受ける。したがって農産物取扱商業資本の機能独自の重要性は、農業生産(供給)や食料消費(需要)、そして農産物の商品としての性格との関連で明らかにされなければならない。

農産物は、一般的に生産単位、消費単位とも小規模、分散的で、かつその集中による大量性に特徴がある。また、生産は地域的かつ季節的で、その供給は不安定になりがちである。一方、消費は周年的で、都市の発

¹ 商業は商品流通のうち再販売購入者の売買からなる部分、ないし再販売購入者の売買としてあらわれる商品流通の側面であり、商業の機能も商業資本の本質の投影としてとらえられる。森下(1960)p.4および、鈴木(1975)p.29。またこれまでの研究では、「機能」という言葉が、商業資本の実際の活動を意味している場合(例えば保管機能、輸送機能)や、商業資本の活動によって果たされる役割を指している場合(例えば需給調整機能)などがあつた。ここでは個別商業資本の経済活動を「機能」としてとらえ、再整理した。
² 御園(1966)、木立(1985)等これまでの農産物取扱商業資本の機能の整理では、需給調整と価格形成を基本的機能あるいは本来的機能としてとらえてきた。筆者はこれを基本的機能によって達成される商業資本の役割としてとらえ、機能とは分けて考える。ここで基本的機能として整理されたものは、藤谷(1969)が商業資本の主要機能の1つとしてあげた数量機能または価格的功能と内容的に一致する。

展にともない空間的にも生産と隔絶する。また農産物は腐敗あるいは変質しやすく、形状や品質もばらつきが大きい商品である。このため、基本的機能の遂行のためには、副次的機能である保管機能による時間的調整、輸送機能による空間的調整、規格・選別機能、包装機能、加工機能による品質的調整が必要不可欠となってくる。また同時に、上記の特徴を有した農産物の市場は不確実性が大きく、不確実性を可能な限り回避しつつ、基本的機能を迅速かつ円滑に遂行するため、危険負担機能、金融機能、情報機能が重要な役割を果たすようになる。すなわち農産物取扱商業資本の機能面の独自性は、副次的機能を全く切り離した形での基本的機能遂行の困難性にある。

3. 発展途上地域における農産物取扱商業資本の基本的性格

発展途上地域において、農業は地域経済の中心に位置づけられることが多い。そのため、農産物取扱商業資本の役割もその経済の中でより重要であるといえる。商業資本の性格は取り扱う農産物の種類によって異なることはいうまでもないが、ここでは多くのアジア諸国の基幹農産物である米を念頭においている³。

発展途上地域における農業生産の担い手は、自給的性格を残した小商品生産者としての農民であり、資本、保有農地面積とも小規模であるのが一般的である。発展途上地域経済全体における急速な資本主義の波及は、食糧供給者としての農民を小商品生産者のままその再生産構造に組み込まざるをえない。そこで市場対応を迫られる農民は、商業資本との結びつきにおいてはじめて農産物を商品化することが可能となる。これは一般的な資本主義の発展段階においてもいえることであるが、発展途上地域の場合、資本主義の急激かつ跋行的な展開による農村と都市の成長の不均衡や流通基盤の未整備が著しく、これを補う役割が農産物取扱商業資本にさせられることとなる。

より具体的には、まず大都市の形成(あるいは都市への人口集中)にともない、需給の空間的、時間的調整のために、保管や輸送機能が必要となる。また農業生産の近代化が急速に進み、近代的な生産財への投資が拡大する一方、灌漑や交通・通信網などの整備は不十分な現状にある地域が多い。生産投資の増大した農民は再生産を可能にするため、商業資本の金融機能に依存する。生産の不安定性も大きいことから、金融機能は商業資本の側にとって貸し倒れの危険負担も大きい反面、集荷機能の継続のためには必要な機能となってくる。同様の理由で、生産財の供給も農産物取扱商業資本の機能の一部となる。また、発展途上地域内では明確な規格基準や検査制度のない農産物が未だ多く存在する。その一方で農産物が外貨獲得のための輸出商品である場合も多く、輸入国の要請に応えるための規格・選別、検査機能を農産物取扱商業資本が果たすことが必要となる。輸入国が先進諸国である場合、発展途上地域の低賃金を利用しての包装、加工も同時に要請することも多い。またこのように国際市場と密接な関わりを持つ農産物の場合、そこでの市場情報の収集も商業資本の基本的機能の遂行において重要になる。とくに、発展途上地域においては、資金や人的資源の不足によって政府がこれら機能全てを担うことが困難なことから、農産物取扱商業資本への期待が大きい。

農産物取扱商業資本がこうした流通機能を純粋に遂行する限りにおいては、何ら問題はない。ところが発展途上地域において農産物取扱商業資本はしばしば「前期的」であるとされ、農産物の市場・流通問題のもっとも大きな要因として指摘されている。この「前期的」性格は具体的には、農産物取扱商業資本の投機性を含んだ保管機能、農民を市場から隔絶する一方的な情報機能、高利貸資本的な性格を強くもった金融機能と前貸しの恒常かによる取引の固定化、明確な基準に基づかない規格・選別機能などとして表れる。発展途上地域の商業資本は、こうした機能の2面性が先進地域に比べより強いのが特徴である。

II タイにおける米の市場・流通構造

1. 米の需給関係

タイでは、米は国民の基本的食糧であると同時に、重要な輸出農産物である。本来、米は自給を目的に生産されてきたが、19世紀中頃の自由貿易条約締結以降、輸出拡大とそれにとまなう作付面積の外延的拡大、1950年代以降の工業化や農業の多角化にとまなう国内消費量の増大、さらに1970年代後半からの米輸出規制

³ 発展途上地域の重要な農産物としては植民地時代以来のプランテーション作物があげられる。この流通に関してはまた違った議論展開が必要である。

の緩和などにより、タイにおける商業的米生産はますます進展している。

表1 タイにおける米の生産状況(1981-1991年)

| 年 | 水田面積 (1,000ライ) | 作付面積 (1,000ライ) | | 生産量 (1,000ライ) | | 1ライ当り収量 (kg) | | |
|-----|-------------------|-------------------|--------|------------------|--------|-----------------|-----|-----|
| | | 雨季 | 乾季 | 雨季 | 乾季 | 雨季 | 乾季 | |
| 全 国 | 1981 | 73,523 | 56,882 | 3,228 | 15,405 | 2,017 | 271 | 625 |
| | 1986 | 74,233 | 59,437 | 3,628 | 17,930 | 2,042 | 302 | 563 |
| | 1991 | 69,313 | 58,205 | 3,705 | 14,902 | 2,882 | 256 | 778 |
| 東北部 | 1981 | 36,183 | 28,224 | 148 | 5,749 | 62 | 204 | 419 |
| | 1986 | 37,445 | 29,831 | 214 | 7,392 | 87 | 248 | 407 |
| | 1991 | 37,973 | 31,369 | 502 | 7,745 | 232 | 247 | 462 |
| 北 部 | 1981 | 16,795 | 12,550 | 352 | 4,663 | 197 | 372 | 560 |
| | 1986 | 16,932 | 13,347 | 437 | 5,101 | 249 | 382 | 570 |
| | 1991 | 15,197 | 13,050 | 665 | 4,031 | 455 | 309 | 684 |
| 中央部 | 1981 | 15,560 | 12,032 | 2,652 | 3,872 | 1,672 | 322 | 630 |
| | 1986 | 14,996 | 12,558 | 3,144 | 4,504 | 1,921 | 359 | 611 |
| | 1991 | 12,531 | 10,536 | 2,433 | 2,441 | 1,558 | 232 | 640 |
| 南 部 | 1981 | 4,986 | 4,076 | 75 | 1,122 | 32 | 275 | 427 |
| | 1986 | 4,861 | 3,701 | 190 | 933 | 76 | 252 | 400 |
| | 1991 | 3,612 | 2,979 | 105 | 727 | 47 | 244 | 448 |

資料) タイ農業省『農業統計』

注) 雨季作についてはn-1/n年度の数値を使用。

1ライ=0.16ha。

タイの水田面積および米作付面積は、近年減少傾向にある(表1)。とくにこれまでタイの米生産の中心であったチャオプラヤデルタを中心とする中央部では、都市の外延的拡大にもなう水田の工業用地への転換や稲作農民の農外就業機会の拡大によって、水田面積が減少、作付面積も輸出規制廃止の影響を受け増加している1980年代中盤を除き、雨季作、乾季作ともに減少傾向にあり、生産量もあまり増加していない。一方、水田面積は減少あるいは微増にとどまっているが、乾季作の作付に著しい増加がみられるのが東北部と北部であり、作付面積および生産量が大きく伸びている。これを、県別の米の自給率を示した図1と照らし合わせてみると、とくに北部の南地域や東部の南東地域が、中央部の米産地と並び、タイの重要な米供給地帯となってきたことが予想される⁴。こうした生産量のうち、実際に国内市場に商品として出回る量の厳密な算定は困難であるが、1農家当たりの米による収入と米の農家庭先価格から推計した1農家当たりの商品化率(1991/92年)をみると、中央部で91%、北部で66%、東北部で40%、南部で57%となった⁵。農家からの聞き取り調査で知りえたところを考慮すると、全国平均では70%前後の米が市場で販売されていると思われる。

次に消費をみると、近年では生産量のうち3割以上が輸出に向けられ(表2)、残りは国内消費に向けられている。タイの米輸出量は、世界の総輸出量の3割から4割を占めるまでに増大しており、世界の米の生産動向が国際市場を通じてタイ国内の米市場に与える影響も大きい。近年では近隣のアジア諸国と並んで、中

⁴ ここでの自給率は県別の精米生産量(精米歩留率66%として粳生産量から計算)、消費人口(1家族の構成を大人2人、子供3人と想定し、子供の米消費量を大人の1/2として計算)、年1人当たり推定消費量(全国平均精米135kg)から計算される県内産米の過不足の消費量に対する比率を示している。ただし実際は、1人当たり消費量は一般に中央部<南部<東北部<北部となっているので、多少東北部、北部の自給率は過大評価されていると考えたほうがよい。

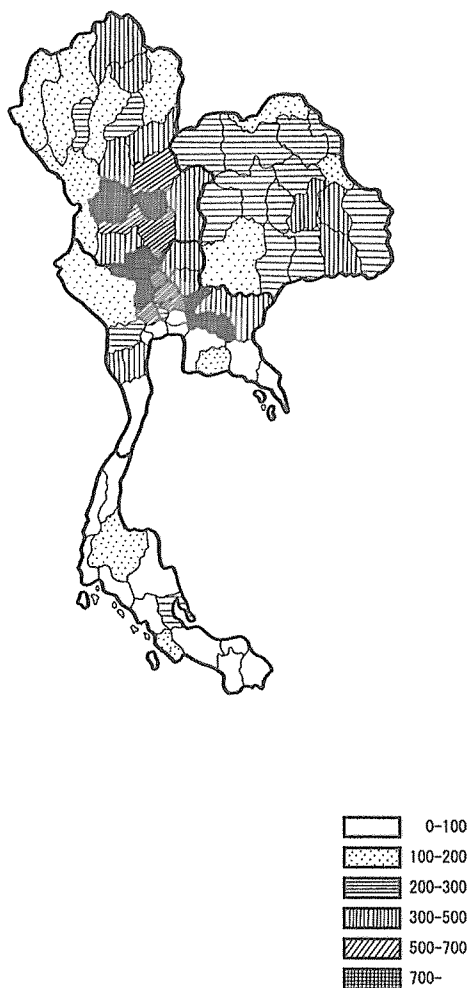
⁵ タイ農業省『農業統計』の数値(雨季作1991/92年、乾季作1992年)を使用。ここでは、地域別の農家庭先価格を入手ができなかったため全国平均の数値を使用している。実際の農家庭先価格の地域差(東北部<北部<中央部<南部)を考慮すると、南部、中央部の商品化率は相対的に過大評価されていると考えられる。農家庭先価格の地域差については、Siamwalla et al. (1990)第10章を参照。

東やアフリカへの輸出が増加している。国内消費では、都市化傾向とともに前出の図1からもうかがえるよう、地方中心都市である以前米生産地であったチェンマイ県やナコンラチャシマ県等では余剰が小さくなっている。また南部のほとんどは米の不足県であり、北部、東北部、中央部からバンコクを経由して、米が移入される。首都バンコク自体も、47万トン以上の米(精米)が都市人口の消費用として他県から移入している計算になる。

2. 米の流通過程の特徴

商品の流通過程は収集、伸継、分散の3つの段階に分けられるが、タイの米の場合、生産者から集荷業者を経て精米業者までを収集段階、精米業者の取引を伸継段階、精米業者から国内の消費者あるいは輸出業者までを分散段階と大きく位置づけることができるであろう。しかし、その流通過程は米の流通形態から大きく2つの過程に分けられる。すなわち、粳流通過程と精米流通過程である。タイでは農家の自家精米はほとんどみられず、農家は生産した粳を簡易脱穀した段階で粳のまま市場に出すため、国内消費、輸出向けとも必ずその流通過程において精米業者を介する。そして、生産者である農民から精米業者までは粳で、精米業者から国内消費者あるいは輸出業者までは精米の形で取引される。精米業者は、流通過程に延長された生産過程における付随的加工を担う伸継卸売商業資本としての性格をもつ一方、タイの重要な産業資本として位置づけられている⁶。このことから、粳の生産者は小商品生産者である農民であるが、精米の生産者⁷は産業資本家の性格を有しているといえ、精米が個人的消費に向けられるのに対し、粳は生産的消費に向けられると考えることができる。また、商品の使用価値的側面をみても、精米は粳に比べ変質、減耗しやすいなどの違いがみられる。したがって、粳流通過程と精米流通過程は、相互規定性がかなり強いとはいえず、粳市場と精米市場という2つの性格の異なる市場を形成していると考えられる。この2つの市場は精米業者を接点とし、連続した市場であることにはかわりないが、流通過程を商業資本の性格からとらえる

図1 タイにおける米の県別自給率



注) 自給率 = 県別粳生産量⁽¹⁾ × 0.66⁽²⁾ × 100 / 県別人口⁽³⁾ × 0.7⁽⁴⁾ × 0.135⁽⁵⁾
 (1) タイ農業・農業協同組合省『農業統計』(1988/89年雨季作と1989年乾季作の合計)
 (2) 精米歩留66%。
 (3) Ministry of Interior, Department of Local Administration資料より。
 (4) 一家族の構成を大人2人、子供3人と想定し、子供の米消費量を大人の1/2とする。
 (5) 1988/89年の1人当たり年平均消費量135kg(全国)。

⁶ 米の流通機構のほとんどがタイ商業省の管轄下にあるが、精米業者だけは工業省の管轄下におかれていることからわかる。

⁷ 実際タイ語の文献では、商業的精米業者による精米は「sii(精米する)」ではなく、「phalit(生産する)」と表記されることが多い。

場合、市場の性格の違い、すなわち商品の性格や需給の特徴をあえて考慮する必要が生じるため、本論文では籾の流通過程のみを取り上げ考察を進める。

Ⅲ タイにおける籾取扱商業資本の機能

1. 産地における籾の流通経路

精米業者は従来輸出に便利なバンコク

に立地することが多かったが、1920年代以降産地への立地移動がみられ、現在ではほとんどの商業的精米所は地方におかれている。このため、籾流通過程とは米の産地における流通ととらえることができる。その現在の具体的な流通経路と各流通機構の大まかな集荷範囲を示したものが図2である。

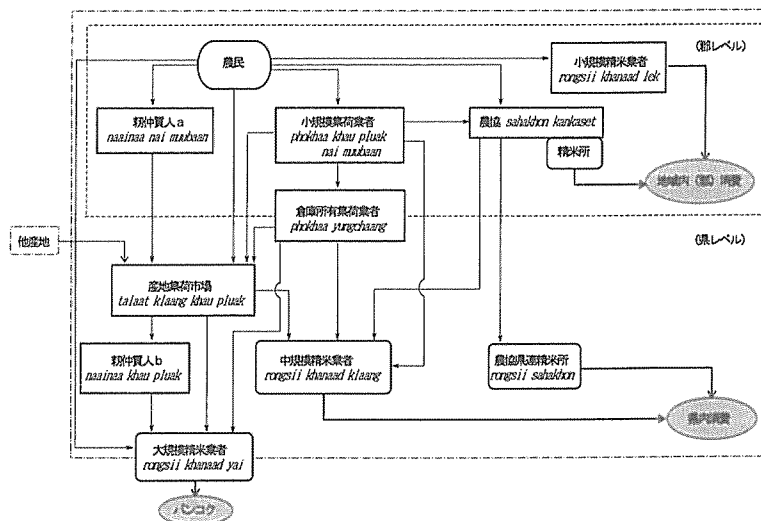
農民は、自家飯米に関しては村落内の小規模精米業者⁸で賃委託精米を行う。販売する米に関しては、従来、村落内で巡回集荷を行う小規模集荷業者に販売し、また小規模集荷業者はより資本規模が大きく貯蔵施設を持った倉庫所有集荷業者に即日即売し、そこから中規模あるいは大規模精米業者へ転売されるのが一般的な流通経路であった。現在ではそうした経路に加え、いくつかの新しい経路がみられる。第1は、産地集荷市場の収集段階への参入である。産地集荷市場は、上述の重要な米供給地帯として台頭している北部の南地域や東北部の南地域において形成されており、一部は半公的な「中央市場」⁹として政府の認可を受けている。第2は農協による集荷である。農協集荷の実態は組合員への貸付金の現物による回収である場合がほとんどであるが、農協が地域の籾の収集段階において中心的役割を担っている場合もみられる¹⁰。農協が地域の籾流通の中心になれるか否かは、地域の産地としての成長よりも、農協自身の経営能力に負うところが大きい。経営能力のある農協では自ら精米所を経営し、独自のマーケティングを行うことも可能となっている。第3に、大規模精米業者による農民からの直接集荷も行われている。この中には一部、契約生産に基づ

表2 タイの米輸出の動向(1975～1990年)

| 年 | 1975 | 1980 | 1985 | 1990 |
|-----------------------|-------|--------|--------|--------|
| 輸出量 (精米100トン) | 9,511 | 27,970 | 40,617 | 40,171 |
| 国内生産量に占める 輸出の割合(%) | 9.4 | 24.4 | 30.4 | 35.4 |
| 世界総輸出量に占める 割合(%) | 11.0 | 21.0 | 37.4 | 32.9 |

資料) タイ農業省『農業統計』, FAO Trade Yearbook
の数値より作成。国内生産量に占める割合は精米歩留66%で計算。

図2 産地における籾の流通経路



資料) 現地調査(1991-94年)、Siemalla et al. (1990)より作成

⁸ 厳密には、賃委託を行う rongsii khanaad lek と、碎米や糠のみを精米料として受け取る rongsii tuu にわけられる。

⁹ 詳しくは拙稿(1993a)参照。

¹⁰ チェンマイ県サンバトン農協、ナコンラチャシマ県ピマイ農協、スパンブリ県ムアン農協など。

く直接集荷も含まれている¹¹。

2. 粳取扱商業資本の機能変化と社会的背景

1) 機能変化の背景

米市場全体における需要の増大にもかかわらず、農民から小規模集荷業者、倉庫集荷業者を通じて精米業者にいたる流通経路が支配的であったとき、粳取扱商業資本の具体的な機能は集出荷(再販売購入)の他、輸送、保管、情報、金融、生産資材供給、危険負担であったといえる。これは、生産者である農民の性格に大きく規定されている。すなわち、資本規模が小さい農民は、まずその生産過程において最も身近な小規模集荷業者の金融機能や生産資材供給機能に依存する傾向があった。これは小規模集荷業者の多くがもともと村落内の商店主や金貸しであったことと無縁ではない。生産された粳は小規模集荷業者からの負債の返済のために、現物のまま集荷業者に渡すか、あるいは収穫後すぐに販売せざるをえないケースがしばしばであった。販売する場合でも、独自に需要を創造することが困難な農民は、やはり最も身近な小規模集荷業者に販売することになる。小規模集荷業者や倉庫所有集荷業者は輸送手段や保管手段を保有しない農民に代わり、粳を生産的消費者としての精米業者の需要に応じて販売する。こうした流通構造において、価格形成は精米市場に精通した精米業者主導で行われ、小規模集荷業者や倉庫所有集荷業者は農民に対し市場情報を分断することによって、さらには場所的あるいは時間的価格差を利用しての差益利潤を得ることが可能となる。

しかしながら、こうした構造は現在質的に変化していると思われ、その背景として大きく6つの社会的要因をあげることができる。

まず第1に交通網の整備および地方におけるモータリゼーションの進展があげられる。タイでは1950年代中頃から近代的な道路技術が導入され、第1次国家経済社会開発計画(1962-66年)以降道路の整備が進んでいる。道路の総延長(建設中を含む)は、1965年から1991年の間に国道は14,082kmから19,905kmへと1.4倍、県道では8,269kmから32,496kmへと3.9倍の伸びを見せている。舗装率も国道で53.2%から99.6%、県道で14.5%から78.1%へと高くなっており、とくに地方での道路整備が急激に進められていることがわかる¹²。かつて農産物の輸送は水運中心であったが、現在では完全に陸上輸送、なかでも自動車輸送中心に移行している。こうした陸上交通網の整備にともない、地方においてもモータリゼーションが進展している。1980年から1991年にかけてのトラックの保有台数の伸びは、バンコクとその近隣県において2.5倍であるのに対し、その他地域では7.0倍となっている。こうした傾向がみられるものの、農民車(農民用小型トラック)の1989年の保有台数は、東北部で35,143台、北部で26,296台、中央部で5,208台、南部で154台となっており¹³、この統計上の数値は実際よりもかなり少ないと予想されることを考慮しても、農家1,000戸当たり東北部16台、北部20台、中央部5台、南部0.2台といまだ十分とはいえない。

第2に農民自身が粳を保管する機会が増大していることが指摘できる。農民の保管施設保有については、統計的な資料がないため確認が困難である。しかし、その他に農業・農業協同組合銀行(BAAC)の粳担保制度¹⁴などにより、BAACあるいは民間の倉庫を利用し、価格変動をみながら販売機会をうかがうことが可能となった。

第3に乾季作生産量の増加があげられる。すでに前出の表1でみたように、乾季作生産量が東北部、北部を中心に増大しているが、乾季作米は雨季作米の価格が上昇する7月から市場に出回るため、価格の季節変動を多少なりとも緩和する作用をもたらすと思われる。実際、図3に示すよう、1990年の粳の農家庭先価格は他年度と比べ季節格差が小さくなっている¹⁵。

第4に情報、通信網の農村への普及があげられる。タイではラジオ放送が1930年に、テレビ放送が1955年

¹¹ これについては、精米業者の企業行動についての検討が必要であり、本論文の課題外となるのでここでは深く立ち入らない。

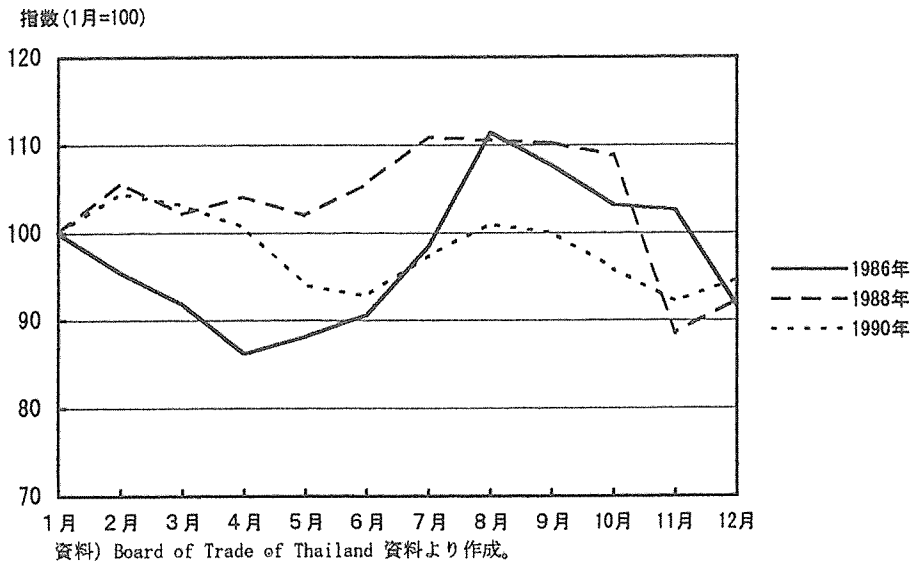
¹² タイ運輸通信省道路局資料。

¹³ タイ運輸通信省陸運局資料。

¹⁴ 農家は収穫後BAACに粳を担保として低利の融資(評価額の80%)を受け、融資期間中に粳価格が収穫期価格および金利以上になれば粳を市場で販売し融資を返済し、そうならなければ粳をBAACに売り渡して残金(20%)を受け取ることが可能な制度。1984年から行われている。

¹⁵ 厳密に米の価格変動をみる場合、供給側だけでなく需要側の要因も考慮しなければならないことはいうまでもない。ここでは供給側の1要因として乾季作生産量の増大をとりあげている。

図3 農家庭先籾価格の季節変動(指数)



に開始され、以来順調に発展している。ラジオの受信台数は1,500万台を超えているといわれ、普及率は約90%におよんでいる。テレビの保有率を地方別にみると、東北部17.0%、北部28.2%、中央部(除くバンコク)4.8%、南部25.4%となっており(1985年)、1980年代前半におけるその伸び率は東北部が29.8%ともっとも高く、ついで北部の24.6%となっている。農民は品種や技術に関する情報を主にテレビで、価格に関する情報を主にラジオで得ていることが近年の研究で明らかになっており、今後も農業関連の番組の増大が期待されている¹⁶。

第5に、消費過程における変化があげられる。タイの米の消費は大きく国内消費と輸出に分けられるが、共通して指摘できるのは米の品種や生産地、あるいは品質や規格が重視されるようになってきた点である。もっとも需要の高い品種はKhao Hom Mali(正式名Khao Dawk Mali 105)であり、この他にも国内市場ではKhao Sao Hai, Khao Tah Heang, Khao Ko Dio等、輸出向けにはKhao Basmaty等が特別な品種として位置づけられている。Khao Hom Maliに関しては、中央部のチャチェンサオ県、東北部のロイエ県、ヤソーン県、スリン県で生産される米がもっとも品質が高いと評価されている。こうした特別な米は、小売段階や外国との取引において差別化をはかり、包装やブランド商標を重視するようになってきている¹⁷。規格については、とくに輸出との関連で基準が細分化する傾向にあることが指摘できる。現在使用されている米の規格基準は、1974年にタイ商業省から出されたものである。それ以前の基準は1954年に出されたもので、White RiceとBroken Riceに大別され(梗米と糯米の区別有り)、White Riceの場合は粒の大きさや碎米の混入率やその大きさ等によって、Broken Riceの場合は碎米の大きさと規格別混入率等によって各々7段階に分類されていた¹⁸。現在の基準ではまず大きくWhite Rice, White Broken Rice, Cargo Rice, White Glutinous Rice, Par-Boiled Riceに分けられる。White Riceは粒の大きさ、規格別碎米混入率、粒の概観、精米具合、水分含有率を基準に11段階に分類されている。以下、White Broken RiceとCargo Riceが7段階、White Glutinous Riceが4段階、Par-Boiled Riceが5段階に分類されている¹⁹。

第6に、政府の対応があげられる。タイ政府の米の流通政策には、1966年から73年にかけての公共倉庫機構(Public Warehouse Organization : P.W.O.)による精米の直接買い入れ、1973年から83年の農民市場機構(Market Organization for Farmers : M.O.F.)による籾の直接買い入れなどがあったが、いずれも買い

¹⁶ 詳しくはTDRI(1987)を参照。

¹⁷ Siamwalla et al. (1990) pp. 210-214。

¹⁸ 長谷川(1962) pp. 408-410。

¹⁹ 実際の規格決定の基準はさらに細かい。詳しくはRice Inspection Committee (1974)を参照。

入れのための補助金支出過剰問題に直面し挫折した。その結果、1980年代中盤以降、政府は上記のような流通過程への直接介入から、制度金融の整備や生産資材供給システムの整備といった間接的な介入に方針を転換している。農村における制度金融に関してはBAACを中心に、生産資材供給に関してもBAACやM.O.F.を中心として整備が進められている³⁰。

2) 現段階の稈取扱商業資本の機能

以上のような社会的変化は、まず生産者である農民や生産的消費者である精米業者の市場対応に影響している。農民にとっては、情報、輸送など市場へのアクセスが大きく改善され、さらに生産資金や資材の前貸しに規定された固定的取引からの解放が、農民の主体的な市場対応を可能とさせつつある。精米業者は、米の分散段階の変化から、米の規格や品質、あるいは消費先によって専門化が進行している。すなわち、図2にあるよう、大規模精米業者はバンコクでの消費向けあるいは輸出向けの米を取扱い、中規模精米業者は県内や近隣地域内の消費者をターゲットとする傾向が強い。また高品質米や低品質米に特化した精米業者が現れている。

流通過程にある商業資本は、こうした生産や消費の変化と上述の社会的変化を受けて、その機能を縮小あるいは拡大せざるをえない状況にある。まず明らかなのは、金融機能や生産資材供給機能が部分的に政府機関によって代替されてきた点である。輸送手段、保管手段、情報などの農村への普及によって、輸送機能や保管機能、情報機能の重要性も以前に比べ縮小している。しかしながら、農村部における輸送や保管手段は未だ不足しており、そうした機能についての農民の商業資本への依存は大きい。しかし、ここで注目しなければいけない点は、金融機能、輸送機能、保管機能、情報機能がもっていた「前期的」側面に関しては、明らかに払拭されつつあるということである。とくに情報の一般化は、商業資本の機能の「前期的」側面による不正な取引機会の減少に大きく影響していると思われる。したがって、これらの機能に関しては、機能本来の役割の実現が商業資本の社会的役割として残されるようになってきたといえる。一方、従来に比べ重要となってきた機能は、規格・選別機能や水分調整等の付随的加工機能である。精米業者の分化に対応した再販売購入を行うためには、規格・選別や付随的加工において不正を行う余地がなくなっただけではなく、そのための技術や情報の収集が不可欠となってくる。

こうした機能の質的な変化は、また産地集荷市場という新しい稈取扱商業資本の存立条件でもある。稈の産地集荷市場は、倉庫所有集荷業者が自ら村落を巡回して行っていた集荷を、自分の倉庫に隣接した敷地内に農民や小規模集荷業者に稈を持ち込ませることによって行うものである。これは稈着場(*thaa khao pluak*)と一般に呼ばれ、倉庫所有集荷業者の新しい存在形態であると考えられる。農民や小規模集荷業者は1つの稈着場での買い取り価格に不満であれば、郡内あるいは県内の他の稈着場に行って販売することができる。これは、従来の1ヶ所における1対1の取引から、1対多への集荷形態の変化ととらえることができる。農協が稈集荷の中心となっている地域は、ほとんどが農協による産地集荷市場の取引が成功している地域である。こうした「市場的」取引はさらに、集荷業者自らは稈の購入を行わず、取引場所、輸送手段、保管手段、規格・選別や水分調整のための設備や市場情報を提供し、その利用手数料で市場を運営している「稈中央市場」(*lalaat klaang khao pluak*)の設立によって進展する。「稈中央市場」では、農民や集荷業者が稈を持ち込み、複数の集荷業者や稈仲買人との取引に応じる。これによって取引は1対多から多対多の交渉によって行われる。このような産地集荷市場の形成は、流通時間の短縮や流通費用の節約に積極的な役割を果たすと考えられる。

しかし産地集荷市場が売買の集合、さらには稈取扱商業資本の社会に要請される機能の統合体として成立する一方、従来ある小規模集荷業者や倉庫所有集荷業者はその存在基盤が弱まり、一部は産地集荷市場に基盤をおき、その委託売買機能によって需給整合や売買接合に貢献する稈仲買人に転化したり、他の作物の集荷をあわせて行うなど、新たな存在基盤を模索している。

³⁰ BAACについては平塚(1990)、生産資材供給のうちとくに肥料に関してはGroup of Agricultural Input and Technologies Research(1991)等を参照されたい。BAACの農業金融におけるシェアの拡大については拙稿(1994)で述べている。

Ⅳ 結 論

タイの米流通の収集段階である籾の流通過程は多様化しており、これは流通再編の過渡的様相であるといえる。本論文では、この過渡期にある籾流通過程を、籾取扱商業資本の機能面から考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

現在、タイの籾流通過程における籾取扱商業資本の特徴は、その存在形態に注目すると、従来からの小規模集荷業者や倉庫所有集荷業者と、新しい産地集荷市場や籾仲買人に大別することができる。しかし、その機能面においては、従来の小規模集荷業者や倉庫所有集荷業者も、社会的需要に応じて産地集荷市場と同様の機能を要求されている。

機能面からの考察の限りにおいては、産地集荷市場を、需給の整合と売買接合という商業資本が社会総資本の再生産に対して果たす役割をもっとも円滑に遂行することを可能にする籾取扱商業資本として評価することができるであろう。しかしながら、実際産地集荷市場の形成は、重要な米供給地帯に限られている。その他の地域における産地集荷市場と同様の機能を果たす籾取扱商業資本の存立条件、あるいは一部地域における産地集荷市場の形成が全国的な米の市場・流通問題に対しどのような積極的な役割を果たすのかについての考察が今後必要となるであろう。

[付記] この研究は、文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の助成を受けている。

参 考 文 献

- 川村琢, 1969, 農産物市場における商業資本の機能と流通機構, 農経論叢第25集.
 木立真直, 1985, 農産物市場と商業資本—緑茶流通の経済分析—, 九州大学出版会, 福岡.
 鈴木武, 1975, 商業と市場の基礎理論, ミネルヴァ書房, 京都.
 長谷川善彦, 1962, タイの米穀事情, アジア経済研究所, 東京.
 平塚大佑, 1990, タイ農業・農協銀行の制度と評価, アジア経済第31号.
 藤谷築次編著, 1969, 農産物流通の基本問題, 家の光協会, 東京.
 御園喜博, 1966, 農産物市場論, 東京大学出版会, 東京.
 森下二次也, 1960, 現代商業経済論(改訂版), 有斐閣, 東京.
 矢野泉・三島徳三, 1993, タイの籾流通における「中央市場」の機能と役割, 農経論叢第49集.
 矢野泉・マハラジャン, K. L., 1994, タイにおける農家負債に関する一考察—「農家負債調査 (Nii Sin Kasetrakon)」を中心に—, 地域文化研究第20巻.
 GROUP OF AGRICULTURAL INPUT AND TECHNOLOGIES RESEARCH, 1991, Fertilizer Situation in Thailand and Its Projected Demand, Office of Agricultural Economics, Bangkok.
 RICE INSPECTION COMMITTEE, 1974, RE:Standard of Rice, B.O.T., Bangkok.
 SIAMWALLA A, and RANONG, V. N., 1990, *Pramuan Kwaamruu Ruan Khao* (THAI), TDRI, Bangkok.
 TDRI, 1987, Agricultural Development Information Program with Special Reference to Audio-Visual Mass Media, TDRI, Bangkok.

Paddy Distribution system and the Commercial Capital in Rice Production Area in Thailand

Izumi YANO and Hidemi MIKUNI

*Faculty of Applied Biological Science, Hiroshima University
Higashi Hiroshima 739, Japan*

The purpose of this paper is to examine the change in paddy distribution system in Thailand, with a special attention to the functions of commercial capital in the assembly stage.

The functions of commercial capital can be classified into two main groups; fundamental and subsidiary. Their fundamental function is to unite supply with demand, both in value and value in use. It can be appeared as acts of commercial capital, such as buying for selling and assembling for dispersion. Subsidiary function includes transporting, storing, standardizing, financing and risk-taking. For the commercial capital dealing with agricultural products, these two groups of functions are closely related. In the developing economies, especially, it is almost impossible to separate them. Thus, it remains a chance for commercial capital to be unjust in transaction.

In a case of paddy market in Thailand, the distribution channels of paddy have become diversified with the expansion of market. The functions of commercial capital dealing with paddy, however, has become more simple and justified by the development of social surroundings, e.g., motorization in rural area, generalization of market information, complicated standardization and indirect intervention of government. This transformation on their functions is embodied in the formation of assembly market in producing area (*thaa khao pluak* and *talaat claang khao pluak*).